様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：６２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０３５０７

研究課題名（和文）社会系教科目における価値学習の開発研究

研究課題名（英文）Development research into value study in social studies

研究代表者
大杉　昭英（OOSUGI, AKIHIDE）

国立教育政策研究所・初等中等教育研究部・フェロー

研究者番号：５０３５３３９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，価値多元社会における社会系教科の価値学習の在り方を明らかにすることである。そのため，欧米の先進的な取組を参考にしながら日本の社会系教科における価値判断を行う授業を開発した。そして，児童生徒は，いつ，どのような価値概念を習得し，それを活用してどのような価値判断を行ったかについて調査した。その結果，小中学生は日常経験を基に主観的・恣意的な判断を行うことが多いことが分かった。一方，高校生や大学生は，功利主義などの概念を価値判断基準として用いていたことが分かった。この結果を踏まえ，小・中学校社会科に社会倫理を取り入れ，高等学校公民科へと接続するカリキュラムが必要となることを提言した。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this research is to clarify the value study content and method.Then, we investigated an advanced match of Europe and America.And, we developed the class of new social studies while referring to it.After having done this class, we interviewed the student as follows. What value notion did you acquire? When did you acquire it?Moreover, what judgment did you do in the class? As a result, it has been understood that schoolchildren often do a subjective, arbitrary judgment based on the experience of daily life.On the other hand, it has been understood that the high school student and the university student were using the concept of utilitarianism etc. as a value criteria.We proposed to take social ethics to the class of social studies of the elementary school and the junior high school, and to need the curriculum connected with the high school based on this result.

研究分野：社会科教育　公民教育

キーワード：価値学習　授業構成　カリキュラム　市民性教育

## １．研究開始当初の背景

社会系教科は，平成 20 年版学習指導要領で持続可能な社会の形成や社会参画の態度を養うことが求められ，紛争，貧困，環境，資源，平和などいずれもその解決に当たり価値判断を伴う課題を考察・判断させることになっている。しかしながら，一つの問題にも様々な意見が存在し論争が起こる価値多元社会と呼ばれる今日，どのようにして価値判断力を育てるかについて確立した考え方，方法があるわけではない。

例えば，研究レベルでは，社会に参画する市民を育成するための知識や技能，態度を育てる市民性教育（シティズンシップ・エデュケーション）が世界的に盛んになっており，日本の社会科教育関連学会でこのことに関連したシンポジウムが開かれ，これからの社会科教育の在り方について議論が行われてきたが，価値的な内容にどこまで踏むべきか，どのように指導すればよいかについて意見の一致は見られなかった。

また，実践レベルでは，そもそも，社会系教科は昭和 33 年度から道徳の時間が特設されたこともあり，それ以前に実施されていた社会科と比べて，価値に関わる内容が少なくなった経緯がある。さらに，社会科教育学研究者からも「社会観や価値観の形成に関わることは，子どもの認識を閉ざし市民的活動を方向づけるか，認識・活動は価値的に開かれるが，主観的恣意的になる」[1)]と指摘され，「事実認識」と「価値認識」で構成された社会認識体制と呼ばれる概念モデルの「事実認識」の育成だけに関わる社会科の構想が示され，社会科授業では事実に関する学習が主流となっていた。

こうした社会科教育の現状において，これからの価値学習の在り方を明らかにするため研究を開始した。

## ２．研究の目的

本研究の目的は，価値多元社会における社会系教科（社会科，公民科を指す）の価値学習の在り方を明らかにすることである。

そのため，欧米で先進的な取組が行われている市民性教育における価値学習と日本の社会系教科のそれとの比較研究を行い，それを手掛かりに価値学習のカリキュラム構成上の指針と授業構成について原理的かつ実践的に探究する。具体的には，判断基準となる価値概念を明らかにするとともに，児童生徒の価値判断の心理メカニズムと発達段階に即してどのような価値概念を習得し，それを活用して判断を行うのかを解明する。さらに開発した授業モデルの有効性を児童生徒の聞き取り調査を通して明らかにする。

## ３．研究の方法

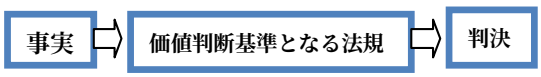
本研究の目的を達成するため，初等社会科担当と中等社会系教科担当の２チームで研究体制を構築し，文献研究により価値概念と市民性教育との関連を検討した。

その上で，価値学習について先進的な取組を行う欧米の市民性教育の研究者に対するインタビュー調査と，初等･中等教育段階の授業視察を行い，その特長や課題について整理する。また国内では，社会系教科で児童生徒が価値判断を行う授業を開発し，授業の実施と，授業後に児童生徒はそれぞれどのような基準によってどのような判断を行ったのか，また，その基準はどのように形成されてきたのかをインタビュー調査を行い，それを分析する方法を取った。

## ４．研究成果

### (1) 基本的な視点

価値判断を伴う学習についての研究を進めるに当たって参考にしたのは法曹界の見解であった。そこでの価値判断は，裁判官が行う判決を一つの典型例としている。その構造は，以下のようになる[2)]。




本研究では，この構造の中核となっている「価値判断基準となる法規」に注目し，社会系教科目において，「法規」に当るものの内容を明らかにしたいと考えた。

### (2) 文献研究・先行研究の整理

まず，文献研究や先行研究から次のような整理を行った。一般に，社会的な問題が起きたとき，解決のための価値判断基準を提供するのが倫理的価値であり，その代表が「法」と「道徳」である。そして，これまで社会系教科目では主に「法」を取り上げ，個人の尊重など憲法の基本原則となっている法的価値について指導してきた。しかし，今日，ごみ処理場はどこに建設すべきか，消費税を上げるべきか，脳死を認めるかなど，社会生活上，様々な問題が起こっており，それらは法的価値や「道徳の時間」（研究当時）で学ぶ道徳的価値だけでは判断できない問題である。そのため，この二つの基準以外に第三の判断基準を想定する必要があると考えた。

そして，この第三の判断基準には，「社会倫理」が相応しいと考えた。さらに，「社会倫理」の中には，「功利主義」「自由至上主義」「社会契約主義」「共同体主義」という四つの価値判断基準の枠組みがあることを手掛かりに検討した。

これに加え，法曹界では，先に示した判決の構造は形式的・論理的に引き出されたものであるため，判断の心理的プロセスを分析する必要があると指摘されている点にも注目し，社会系教科においても，実際に児童生徒が価値判断を行う際に，判断基準をどのように学び，活用してゆくのか，その心理的プロセスについて検討する必要があると考えた。

### (3) 外国調査

外国調査については，フィンランド，ドイツ，イギリスを訪問し，調査結果を次のよう

に整理することができた。

平成 27 年度は，フィンランドのヘルシンキ大学及びトゥルク大学の市民性教育を専門とする研究者へのインタビューを行った。その結果，価値判断は宗教的な領域に関わるため，禁欲的になっていること，また，意思決定の際に，道徳的価値が入ることなどの意見を聴取した。

平成 28 年度は，ドイツのリューネブルクの小学校で授業参観し，価値判断あるいは意思決定に当っては，児童を信頼しており，全て話し合いの上で合意形成がなされれば，それを尊重すべきという意見を聴取した。

さらに，イギリスのロンドンにある公立学校フリースクール 21 で校長へのインタビューを行った結果，価値判断を行う授業についてはＰＢＬ（プロブレム・ベースド・ラーニング）で行うという意見を聴取した。

平成 29 年度は，ドイツのカールス・ルーエのギムナジウムでの授業を参観し，指導している大学の研究者から価値判断あるいは意思決定を行うために，市中に監視カメラを設置することの是非など論争的なテーマについて，政治学の概念を活用して話し合うべきだという意見を聴取した。

３年間の外国調査から，価値判断基準については，客観的に優先すべきものがあるのではなく，これまで人類が形成してきた概念を手掛かりにしつつも，具体的な問題について話し合いを通して合意形成していくものだと整理できた。

(4) 授業モデルの開発と国内調査

以上の文献研究・先行研究及び外国調査の整理を踏まえ,本研究では価値判断を行う授業を開発・実施し，児童生徒が発達段階に即してどのような価値概念を習得し，それを活用してどのような判断を行うのか，その心理メカニズムとプロセスを解明することにした。具体的には，小学校，中学校，高等学校，大学という異校種の児童生徒，学生に対し，価値判断を行う同一授業（同じ題材，発問，資料）を実施する。そして，授業後に児童生徒，学生はそれぞれどのような基準によってどのような判断を行ったのか，また，その基準はどのように形成されてきたのかを分析した。

なお，本研究では次のようなコンセプトに基づいて，価値判断授業を開発した。

・個人の生き方を超えた社会の在り方を問うもの。
・資源配分の在り方（政策判断の根拠）を問うもの
・人類が蓄積した複数の倫理的判断基準を含み持つ事例を題材にする。
・倫理的判断基準については，背景にある伝統，文化，社会の有り様が異なるため，判断基準には定まった正解はなく，関係者それぞれの合意によって判断基準が形成される。

授業の流れは以下のとおりである。

①人類が経験した新型インフルエンザの爆発的な感染＝パンデミックの事例であるスペイン風邪，アジア風邪，香港風邪の被害状況とその発生メカニズムをＤＶＤで視聴させる。
②パンデミックの有効な対応策はワクチン接種であるが，すぐには製造できないためワクチン（医療資源）の配分順を決めなければならないことをＤＶＤで視聴させる。
③児童生徒にワクチン（医療資源）をどのような人たちから接種すべきか，その順番を決定させるとともに，グループで議論させ，改めて自分自身の判断基準を内省・吟味させる。

なお，パンデミック授業の前に，思考実験的に価値判断を行う場面を設定した授業を実施した。

思考実験の内容は次のようになる。砂漠で遭難した９人がいる。その内訳は，「長時間早く走れる３人」「走るのは遅いが体力のある３人」「長い間この９人の集団につくしてきたが現在ケガをして歩けず力つきそうな３人」である。この９人が何日も歩き続け，やっと木陰を見つけて休んでいた。そのとき，頼みの飲み水があとコップ３杯（３人分）しか残っていないことが分かり，最後に誰に飲ますか決めなければならなくなった。このような問題場面を設定し，誰に水を飲ませればよいか児童生徒に判断させる。

| ３人のとくちょう | コップの水を飲むことで生まれる効果 |
|---|---|
| 長時間早く走れる3人 | 成功するかどうか分からないが，どこか人がいるところを早くさがして全員を救助してもらえるかもしれない。 |
| 走るのは遅いが体力がありケガをした3人を背負ってきた3人 | もう少しケガをした3人を背負っていくことができるかもしれない。 |
| 長い間この集団につくしたがケガをして力つきそうな3人 | ケガをした3人が力つきるのをのばすことができるかもしれない。 |

これは，ナンシー・カートライトの『いかにして物理法則は嘘をつくか』の着想に基づいて，現実の状況のうち重要部分だけを取り出して考える思考実験によって資源配分の在り方を検討させようとしたのである。

すなわち，砂漠において貴重な水（資源）

を誰に飲ませればよいか（＝配分）を判断させ，その判断の根拠（「より多くの人を助けることが善である」，「最も困っている人を助けることが正しい」，「共同体に貢献した人に報いることが善」など）を明確化して考察させる学習場面を設定することにしたのである。

このような思考実験と実際に検討されているパンデミック時のワクチン接種順をどうするかという判断を求める授業を設計し実施した後，教師（授業者）及び児童生徒，学生へのインタビューやアンケートを行った。インタビューやアンケート結果を検討するに当たっては，事前に次の①から④の分析枠組みを準備した。これらは認知心理学の成果を参考にしている[3)]。

① 新しい知識の獲得は既有知識に基づいてなされる。したがって教師は，生徒が教室にもち込んでくる不完全な理解や誤概念，素朴理論に注意をはらいながら，生徒たちが既有知識を足場にすることによって，より高度で成熟した理解に到達できるように支援することが重要である。

② 初心者の知識は，「核心的で重要な考え」を軸に体制化されたものではない場合が多い。彼らは，適切な公式を探して問題に取り組み，彼らの日常的な直観に合う答えを選びがちである。

③ 熟達者の知識は，当該領域に関連する事項や公式の単なる羅列ではなく，その領域についての思考をガイドする概念，すなわち『核心的で重要な考え』を軸に体制化されたものである。

④ 熟達者の推論能力や問題解決能力は，知識がよく体制化されているかどうかに依存している。

(5) 調査結果の概要

ア 小学校

・ ワクチンの接種順の判断を行うに当っては，授業で学んできた内容よりも，本やニュース，あるいは近親者がなくなったといった過去の経験を基に判する傾向がある。（回答者 9 名）

イ 中学校

・ワクチンの接種順の判断を行うに当っては，「哲学者の本」「漫画」「当日のビデオ」などを手掛かりに判断しており，社会科の学びを基にしたという回答はなかった。（回答者 39 名）

ウ 高等学校

・ワクチンの接種順の判断を行うに当っては，学校生活の経験を手掛かりに判断することが多いとしながらも，一方で「現代社会」の授業や「小論文指導」といった学習経験を基にして「功利主義」「効率」といった考え方で判断する生徒も見られた。（回答者 21 名）

エ 大学

・ワクチンの接種順の判断を行うに当っては，「最大多数の幸福」「社会的役割」「弱者保護」などの判断基準が挙げられた。これらは，学校教育の中で学んだとする学生が 38%，日常生活の中で学んだとする学生が 34%ととなっており，割合は拮抗している。（回答者 50 名）

(6) 研究成果のまとめ

ア 価値学習の課題

社会系教科目では，昭和 30 年代に「道徳」が設けられて以降，小学校，中学校社会科においては価値的な内容が少なくなり，かつ，価値的な内容の取扱いについても禁欲的であった。その結果，児童生徒は価値的な問題に対して日常経験を基に主観的・恣意的な判断を行ってきたと考えられる。このことは，高等学校，大学において社会倫理の内容を学ぶ機会のあった生徒が功利主義や社会契約主義等の観点から判断をしていることとは対照的である。

先の分析枠組みから考えると，日常的な直観に合う答えを選びがちな「初心者」から，『核心的で重要な考え』に基づいて考える「熟達者」への成長をもたらす体系的なカリキュラムと，学習内容としての社会倫理とそれを活用させて問題を考察・判断させる学習が不足していると考えられる。

イ 改革の方向性

前記の課題を踏まえたとき，まず小・中学校社会科の内容として社会倫理を取り入れ，高等学校公民科へと接続するカリキュラムが必要となる。また，児童生徒が社会問題に直面した際，価値判断を行うために我々人類が蓄積してきた基準（＝「核心的で重要な考え」）が複数あること，また，それを自立的に構築する「学び」の機会を設けることが必要となる。

その際，それらの基準（＝「核心的で重要な考え」）は客観的に存在しているという観点から教授するのではなく，具体的な文脈の中で，自立的に築くことができるよう，教師の適切なアドバイスを行うことが必要となる。

【註】

1) 森分孝治「市民的資質育成における社会科教育」『社会系教科教育学研究』社会系教科教育学会 13 号，2001

2) 宮田量司「法的判断基準と理由づけ」『武蔵野大学論集』第 54 巻第３号，2007

3) 米国学術研究推進会議編著／森敏昭・秋田喜代美監訳『授業を変える―認知心理学のさらなる挑戦―』北大路書房 2012

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　11 件）

① 須本良夫・浅野光俊，社会科授業における教師力を高める省察の研究(2)，岐阜大学教育学部研究報告（紀要）人文科学，査読無，第 66 巻 1 号，2017，31-40

② 大杉昭英・須本良夫・橋本康弘・中原朋生・田中伸，社会科授業における価値学習の検討-生徒の認識内容の把握を通して-，岐阜大学教育学部研究報告（紀要）人文科学，査読無，第 66 巻 2 号，2017，37-48

③ 田中伸・橋本康弘，高等学校社会系教科目における価値学習の実態と課題-生徒の価値判断基準とその変容の分析を通して-，法と教育，法と教育学会誌，査読無，第 7 号，2017，5-15

④ 田中伸・高木友美・北川住江，消費者市民社会の構築を目指した教育実践開発方略-未来社会の創造を目指した主権者育成論としての消費者教育実践-，岐阜大学教育学部研究報告（紀要）人文科学，査読無，第 65 巻 1 号，2016，37-48

⑤ 田中伸，コミュニケーション理論に基づく社会科教育論-「社会と折り合いをつける力」の育成を目指した授業デザイン-，社会科研究，全国社会科教育学会誌，査読有，83 号，2016，1-12

〔学会発表〕（計　6 件）

① 大杉昭英・橋本康弘・田中伸・須本良夫・中原朋生，社会科における価値学習の検討-生徒の認識内容の把握を通して-，全国社会科教育学会，2017.10.28，国立大学法人広島大学（東広島市）

② 大杉昭英・橋本康弘・田中伸・須本良夫・中原朋生，社会系教科目における価値学習の実態と課題(2)-授業内容と高校生へのヒアリング調査の分析を踏まえて-，日本社会科教育学会，2016.11.5，国立大学法人弘前大学（弘前市）

③ 大杉昭英・橋本康弘・田中伸・須本良夫・中原朋生，社会系教科目における価値学習の実態と課題-子どもたちの価値判断根拠の実態調査から-，社会系教科教育学会，2016.2.20，国立大学法人鳴門教育大学（鳴門市）

〔図書〕（計　4 件）

① 須本良夫・田中伸，社会科教育におけるカリキュラム・マネジメント-ゴールを基盤とした実践及び教員養成のインストラクション-，梓出版，2017，256 ページ

② 大杉昭英，アクティブ・ラーニング　授業改革のマスターキー，明治図書，2017，136 ページ

６．研究組織

(1)研究代表者

大杉昭英（OOSUGI,AKihide）
国立教育政策研究所・初等中等教育研究部・フェロ-
研究者番号：５０３５３３９７

(2)研究分担者

中原朋生（NAKAHARA,Tomoo）
川崎医療短期大学・医療保育科・教授
研究者番号：３０４１３５１１

須本良夫（SUMOTO, Yoshio）
岐阜大学・教育学部・教授
研究者番号：３０５４７６９１

橋本　康弘（HASHIMOTO, Yasuhiro）
福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・教授
研究者番号：７０３４６２９５

田中　伸（TANAKA, Noboru）
岐阜大学・教育学部・准教授
研究者番号：７０５０８４６５